

李徳辰氏のコメントに対する回答

伊吹敦（日本 東洋大学）

先ずは李徳辰教授が拙稿を丹念に読んで率直なご意見をお寄せいただいたことに感謝の意を表したいと存じます。私は、つねづね人の批判は自分の考えを磨くためのよき研磨剤だと考え、いかなる批判も真摯に受けとめたいと願っていますが、今回の李先生のご批判も、自分の考えを確認する上で非常に有益なものでした。しかし、それは、李先生のご意見に同意するというわけでは決してなく、自分の考えが一般的な禪宗史観と大いに異なるものになってしまっているということを確認する機会となったという意味においてであります。それはともかく、李先生のご質問に対する私の考えを述べましょう。

先ず、2の天台宗が禪宗に代わられた理由ですが、それは端的に言って、天台宗は仏教の中国化を推し進めましたが、禪宗のそれはより徹底的であったという点に求められます。特に問題となったのは、南北朝期の佛教教學は、必ずしも宗教の本質に関わるものではなかったにも拘わらず、その傳統を捨てることができなかつた点です。その点で天台宗は、中國人にふさわしい佛教を建設するという視点からすると、十分でない点があつたと考えます。

それから、天台宗が禪宗の形成に及ぼした影響ですが、私も一時期、北宗禪の經文解釋が天台の影響のもとで成立したのではないかと考えていた時期があります。しかし、今では、むしろ天台と禪が同じ傳統を繼承したと見るべきだという考えに傾いています。天台宗と禪宗に共通する点があるからといって、直ちに二宗の間の直接的影響關係を考えるのは危険です。この問題は、今後、慎重に研究されるべきだと思います。

3についてですが、『楞伽師資記』の慧可章は、『修心要論』などの文書を取り込んで後から作られたものであり、それを根據に慧可の思想を論じうるような資料とは言

えません。慧可の思想を伝える資料は『二入四行論』以外では、『楞伽經』を授けたという傳承くらいですが、そこから類推して悟りに段階性を設けなかったと判断できるという本論の主張は無理のないものだと考えます。

4と5については、故意に慧能を排除したのではなく、もともと慧能は問題にする必要がない、あるいは、問題にすべきではないと考えております。それは慧能の思想をこれだと特定できる資料がないし、慧能が神秀らの他の弘忍の弟子と本質的に異なる思想を抱いていたと考える理由がないからです。これに關聯して、李教授は神秀に「了心修道」という言葉があると言われますが、私には心当たりがございませんし、「南頓北漸」という言葉は後世のもので、根據にはできません。更に言えば、「染淨不二」の心性觀を慧能に特有のものとする根據もないと考えます。

私見に據れば、禪思想の基本は東山法門で確立されており、その弟子たちは、慧能も神秀もそれを承け繼いでおり、基本的思想に違いはなかったはずです。ただ、中央に進出した人々には、環境の變化のため、やがて思想的な變化が生じ、それが神會によって「北宗」と呼ばれて批判されるようになった。しかし、その神會には本論に述べたような思想的な保守性があったため、主流になれず、東山法門以來の基本的思想を徹底させた馬祖にその地位を譲ったというわけです。ですので、私は、慧能—神會—馬祖という一般的な系譜を採りません。

最後に6についてです。世界に確實なものなどありません。それが佛教の眞理です。従って、私は論文は全て蓋然性を述べるだけのものだと考えています。そして、その蓋然性の度合いも場合によって様々ですから、私は常に自分の判断する蓋然性の度合いに応じてその表現を使い分けています。もし、その蓋然性を超える表現を用いれば、それは端的に誤りであり、結果として誤った結論を導出することになると考えます。従って、李先生の批判は当たらないと考えています。

以上、李先生の質問に對して私なりに回答致しました。基本的な考え方に大きな違いがありますが、今後の研究の進展によって、これは解消してゆくものと信じています。

なお、發表の際、人民大學の張風雷先生、並びに創價大學の菅野博史先生より、本論文において慧思に關して『景德傳燈錄』を資料として用いていることに對し、既に

『續高僧傳』に同様の記述があることを教えていただきました。ここに感謝の意を表するとともに、本論文の讀者に對しては、この點を修正して利用して頂けますよう、お願いする次第です。